

原次郎氏が語る大川平三郎

— 原氏の来し方九十年 —

坂戸市立中央図書館

(一)

昭和六十一年五月十五日

対談者 図書館長 飯高節子

○ 今年は、大川先生が亡くなられて五十年ということで、桜影会の皆さんも図書館の展示コーナーを十七日に、見に来られますが。

原 桜影会に入っていた人もあるのでしょうか、この近くに。

○ ええ、坂戸にも何人かいらっしやるようです。でも今度いらっしやるのは、桜影会でも紙の博物館を中心として動いていらっしやる方たちのようです。で、五十年記念をするために、紙の博物館で展覧会を開かれるそうです。以前寄贈していただいた資料を、またお貸しすることになるかもしれません。図書館というよりも、むしろ坂戸市として大川先生の資料を収集していかなくてはならないし、大川先生の薫陶を受けられたといわれている、原先生の資料も集めなければなりません。今日は、原先生からごらんになった、坂戸市、三芳野がいろいろな面で受けた影響を中心に、お話を伺いたいと思います。先生が大川先生に出会われたのは、おいくつくらいの時でしょうか。

原 中学を出てから：二十四か五歳ですね。二十一歳で青年団に入り、翌年自らすすんで団長になりました。というのは、当時小学校は、各市町村の税金で全て学校の費用を賄っていましたので、とかく市町村議員の有力者は、先生達をばかにしていました。で、私は心配して、有力者を学校から追い出したくなったのです。郡庁に出向いて小学校の実態を申し上げ、良い校長先生を入れてもらうようお願いし、それができませんでした。やがて学校は立ちなりました。家は百姓をしていましたから、私が上の学校に行くことには反対で、父は私に百姓を継がせよう

としていました。それで父とはけんかしまして、かくれて勉強して旧制中学へ入りました。

中学に中くらいの成績で入りまして、一学年に百二十人くらいいましたが一、二年過ぎて三年の頃から、全ての教科で百点をとろうと望みを立てたのですが、実現するのはなかなかむずかしくて、勉強するしか道はないと思ひまして、学校の行き帰り一歩いて一時間半かかりました。一にも勉強しました。教室では、先生の話を一言ももらさず聞こうとしました。わからないことがあると、授業が終わってすぐに先生をつかまえて尋ねました。テストは先生が熱心に教えたところを山かけて、半分以上出ましたね。そんなに努力をしても、なかなか百点はとれませんでした。家は地主でしたので作男が三人おりまして、いっしょに負けずに百姓をやりましたけれど、どんなに一生懸命働いても百点をとる苦勞より楽でした。この、努力したということが、後の私のしたことに大いに影響しました。

大川翁とは、私が青年団に入りまして、団長になり、百姓をして、毎年水害に悩まされながら何とかしてこれを防ごうと思っている時に出合いました。大川さんはすでに偉かったのですが、当時私の村は大川さんとは断絶していました。というのは、耕地整理がありました。大川さんが寄付をしてくださったのですが、そのことで悪い噂がたつて、大川さんはお怒りになられてしまったのです。そこで私は、向島に住んでいらした大川さんにお合いして、村を良くしようと思つていることを伝え、断絶をやめて村のために力になってほしいとお願ひしたのです。大川さんはできるだけのことをしてくださると約束してくれました。青年団の顧問になってほしいとお願ひすると、これも快くひきうけてくださって、何しろ貧しくて団旗が無いと申しますと、大へん立派な青年団旗を作ってくれました。

○ 先生は、うすうすとは原さんのことを御存知だったのでしよう。

とんでもありません。当時大川さんは日本の大実業家ですよ、二十くらいの方の会社の社長をしていました。多忙な人でした。豪傑で頭も良かったです。それで懇意になりまして、三芳野村は、農協が悪かったのです。村を良くするには、農協を作ることだと大川さんは言われました。

「お前がしろ」と。その年の忘年会の際”農協をよくしなければいけない”という演説を行いましたところ、賛成する人がたくさんいて、翌年二月の農協の総会での選挙で、大川さんと私は役員に選ばれてしまいました。困って大川さんに相談すると、「私は忙しいからお前が事務をやって、私は理事長をやるう」とおっしゃるので、心配ながらひきうけました。二十六歳で専務となって、とにかく一生懸命やりました。私は三悪―病氣・貧乏・けんか―追放を目標としました。

○ その頃の三芳野は、勝呂に比べ貧しかったですか。

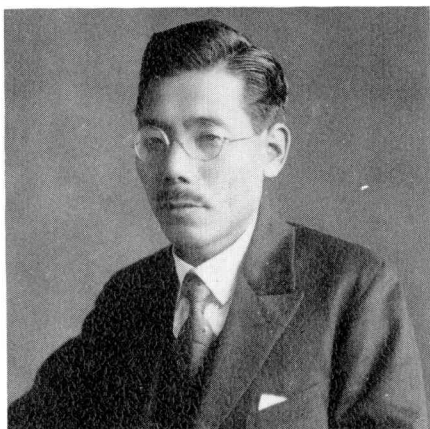
原 ええ、勝呂もひどかったですね。坂戸はいくらか良かったです。それを河川改良を行うことにより、だんだん良くしていきました。

○ 理事長さんは、いろいろと援助をしてくださったのですね。

原 ええ、何かあるとその都度相談に行きました。

○ 一日がかりでしょう。

原 そうです。川越まで自転車で行きました。夏、あんまり暑い時には服を着ないで。その頃私は、百姓をやっていたから、服を買うのもつるしの洋服屋で安いものを買いました。そのいでたちで大川さんの事務所へ行きました。すごい車であちこちの社長さんたちがズラリ来てまして、そこへ百姓の伴で農協の専務である私がボロ服着て行くのですから「独立自尊」という福沢諭吉の言葉を思い出しまして、こ



大正13年、28歳

の心でいきました。

○ 大川先生も、そのような経験をずい分お持ちでしたよね。

そりゃ、信用はされましたが。でも比較になりません。大川家は地主で、剣道をやっておられました。竹刀番であちこち教えてまわっていました。渋沢家にもその関係で行ったのです。父親が上手で川越藩につとめていまして、その頃大川さんは生まれたのですが、給料がとて少なくて、生活はたいへんだったようです。

十二歳で大川さんは、松山へやられました。貧乏なので毎晩はお風呂に入れない。懇意な油屋の主人に気に入られてお風呂に入らせてもらっていたのですが、ある日店の前に人だかりがして、何だろうと近づいてみると、油屋の奥さんが酒を飲んで、いい人だったんですが唯一の欠点は、酒が入ると酒乱になってしまうということだったんですけれども、チャンチャラやっていると酒だったのです。大川さんは「この人は今、病気の状態なのだから、それを皆で見ているなんて失礼だ。」と大ぜいの人を説得して帰してしまいました。そのことを油屋の主人が見ていて「東京へ出るように」と旅費を出してくれまして、大川さんは渋沢家へ行ったのです。

渋沢氏は大川さんを王子製紙に入れました。最初の仕事は釜焚きでした。火をたいて機械を使えるまでにする時間を節約しようと、一時間、他の社員よりも早く出社して、皆が来てすぐに仕事にかかれるようにしていました。そのことを渋沢さんは知っていて「大川は偉い」ということになったのです。

○ 大川さんという人は、本当にすばらしい人だったのですね。

すごい人です。紙の技術を学んで、王子製紙が社員をアメリカへ視察に送りこむということになった時、大川さん自身も行きたいと望みまし、まわりの人たちも薦めたのですが、社

長の渋沢さんが「大川はまだ若いし、英語もできない」と首をたてに振らなかったのですが、試験をしてみると、英語はペラペラ、科学は英語で学びましたし、数学・物理と全ての質問に答えられるのです。英語の辞書は三冊をボロボロにしました。

○ さきほど原先生が、中学時代に百点をとることを目標にしたとおっしゃいましたが、大川さんも何か目標をお持ちだったのでしょうか。

原 そんなことはなかったでしょう。何といっても天才でしたから。大川さんのお母さんが渋沢さんの妹でしたから伯父にあたったわけですが、渋沢さんは本当に厳しかったですね。で、大川さんはアメリカへ渡り、視察をしたのですが、なるべくお金を使わないように工場の技術者の家に居候させてもらって、お手伝いをしながら浮いた宿泊費を日本の実家に送ってあげていました。徹底していましたね。アメリカに行く前にもよく徹夜をしていました。

○ 大川先生は、どちらかというと企業家・財界の大物であって、同時に科学者であったのですね。

原 科学者。でも全てのことに通じていました。浅野総一郎や安田善次郎は仲間でしたね。

○ 先生が青年団長になられて、三芳野で一生懸命のときに、大川先生は年に何回かこちらにおいでになりましたか。

原 毎年総会の時には来られました。その時には私もいろいろと工夫いたしまして、村の人たちに道にずらりと並んでいただいて迎えました。先生に気づかれないようにあれこれいたしました。大川さんは、下の者の面倒をみてどうこうということはないのです。私がどんなことをしても、そのお礼に報酬ということは気づかれないようでした。それで大川さんが来られる時に

原 は”村の人におみやげをあげてほしい”というようなことを秘書役にこっそり頼んでいました。

○ そういう、仕事の一番大事なところでお互いを信じ合う心を感じるんですが、なかなかできることではないでしょうね。

原 私の気持ちを大川さんは、大川さんの気持ちを私は十分知っていましたから。大川翁との出会いがなかったら、百姓をしていたでしょうね。

○ 青年団長をしていらして、大川先生から受けた精神的影響は大きかったですでしょうね。

原 ええ、いろいろとありましたよ。お金を貸して、返してもらったための催促が無理な方法だということ、相手に脅かされまして、萎縮した際には叱られました。でも叱るといふことは、私を愛してくれているからだとかわかっていました。尊敬していました。

○ それだけに、先生のことを大事にしてください。かわいく思っていたのですね。

原 そりゃ、大事にしてください。

○ 合うとほっとなさんじゃありませんか。特に先生の持っていたらっしゃる若さとか理性とかいうものに。

原 まあ、ほっとはしなかったでしょうね、”どうやら一人前だなあ”ぐらいだったでしょうね。むこうは英雄なのですから。凡人じゃありませんから、我々のように、比較にもなりませんけどね。

○ 大川さんのことを調べれば調べるほど、大へん男っ気のあった人ではないかと思えてくるのですが。

原 強かったですからね。

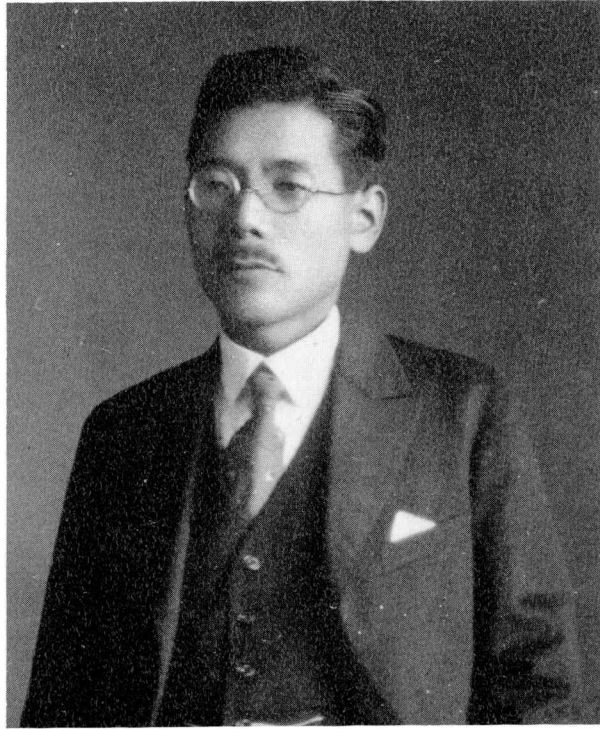
○ 例えば、渋沢さんと大川さんが王子製紙にいらした頃、三井財閥が藤原さんを中心として入ってきましたね。辞める時など、ものすごく豪快でしたよね。

原 大川さんは、王子製紙は乗っ取られたのです。富士と王子と樺太が争いまして、富士が王子につきまして、大川さんは弾き出されてしまいました。

○ あの時、日本で初めての労働争議「ストライキ」があったのですね。当時のことを我々が本で読むと、とても興味があります。でも、ま、そのことよりも、原さんと大川さんを大事にしていかななくてはと、皆が思っています。大川さんが亡くなられて五十年のあいだに、日本にはいろいろなことがありましたからね。それでたくさんのことを受け継がれた先生が、ずいぶん埼玉県のなかでも、いえ、もっと大きく、国全体のなかでも本当にいろいろのことをなされたのではないかと……。

原 まあ、人間というのは、どうのこうの言っても環境の広いところにはなくて、大きいことはできません。東京に出なければだめです。川越に居たって川越だけでは大きい仕事はできないですよ。

東京に行けばあります。だからよく私は言います。環境が大きくなければと。ちょうど松の木が、素質があっても狭い庭や盆栽にしていたのとはだめなのと同じです。海岸があれば、天を目指してでっかい松になります。人間も、実力があっても環境が広くなくては大きくなれないです。どんなに力があっても、坂



戸に居ては坂戸に居るだけの仕事です。

昭和5年、35歳

原

○
でも、三芳野の人たちにしてみれば、先生が農協の理事でいらした当時から三芳野ってずいぶん変わってきたと思います。

いや、大して変わってないですね。まあ、変わったのでしようけれど、変わればえもわからないし、私にしたことがあまり残っていませんね。
おかげ様で河川改修は残りましたけれど。

原

○ それによって三芳野の人たちは、ずいぶん救われたでしょうね。

救われましたけど、わからないですね。
家がきれいになったって、自分でやったと思っ
ていようから。そりゃ、うんと水害で苦
しんだ人たちは知っています。そうでない人は
忘れますから。だけど治水問題はね、忘れない
ように他の仕事をすすめてくれますから。と
にかく堤防は大きくなるし、道は良くなるし、
橋はかかるし。

○ でも、あれだけ治水事業が進んで、今は水害も
なくなつて、昔から代々続いた農家の人た
ちは、おわかりでしょうね。

ええ、わかっているでしょう。でも、人間とい
うのはわかるように求めるのは無理ですけれ
ども。でもね、私は二十五、六年かけて治水
事業を達成できたのですから…。
自分で喜んでいますよ。

原

○ この次は、原先生と治水事業のことについて、
お聞きしたいと思います。

坂戸で忘れてならないのは、先生の治水事業だ
と思うのです。次回は、先生が大川先生にお合
いして、「人間は小さなところに居たのではだめだ、
大きいところへ行け。」という大川先生の本音
を受け継がれて、その後坂戸の中で先生がなさ
ったこと、それを知りたく思います。町の発展
と治水事業は大きなかわりがありますから。時
間をかけてお聞きしなくてはと思っ
ています。

(二)

昭和六十一年九月三日

対談者 図書館長 飯 高 節 子

○ 原先生が、村のために治水事業とがっちり組んでやっていこうと思われたのは、お百姓をやって青年団に関係した頃からですか。

原 中学を出て十九か二十歳。それから一年間、親戚に漢学に秀でた人がいましたのでそこへ教わりに行きました。

また、中学の頃に国語の先生で私のことを気に入ってくれた方がいまして、そこへも行きました。そうしながら百姓に精を出しました。

やるからには、この気性でしたから……。はじめは治水事業。水が出てしまうから米はよくとれない。養蚕に使う桑なら、大水になっても大丈夫でした。それで農家は皆、養蚕をやりました。二十二、三歳の頃、あちこちをまわって三十人ほど集めて組合を作り、郡に頼んで専門の先生を呼んでもらって、養蚕の成績をグンと上げました。

繭をとったのを買いに来る時代でした。王子製紙へ行っって適当な値段でとってもらっていました。治水については、大川さんはその頃、村と断絶していました。二十三歳の頃合いに行き、事の次第を話して顧問になっていただきました。

○ 二十二、三歳で当時一今の時代でもそうですが一そのようなことを行うのは、かなり覚悟のいることでしょうね。

原 ええ……。そういう点では自分でもよくやったと思います。

大川さんに団旗を作っていたとき、これを明治神宮から大川さんの住む向島まで、小学校の用

務員さんに頼んで担いでもらって行きました。
団歌も作り、大川宅の前で歌いました。青年団には百人ぐらいました(歌)

○ 青年団長という立場でありながら、個人では一原さん御自身では一かなり処世術というようなものを学ばれましたか。

原 まあ、それはそうです。何をやるのにも、その場で一等でなければなりません。上の人に仕えるにしても、言葉だけなら言えます。でも、個人で郡長とかに会いに行ったりするのに、どのように話をもっていこうかと、一信用されようとは思いませんが一いつも考えていました。

○ 養蚕組合や青年団を作るにも、人を説得しなくてはなりませんよね。

原 そうです。養蚕組合のときもお金はかかりました。奉加帳を持って、少しずつでも集めてまわりました。

○ それはやはり、原先生ならばこそおできになったのでしょうかね。

原 いえ、誰だってやればできるんですけれど、実際に行える人は少ないですね。

○ 先生がそういうなかで、県会議員をして政治へ入ろうと思われたのは、どんなきっかけがあったのでしょうか。

原 まわりの人は、はやく県会へ出るようにと言っていたのですが、大川さんは、政治に参加してはいけないよ、と言っていましたので、なかなか出られませんでした。

私が県会へ出たのは四十五歳、昭和十五年のときでした。大川さんが亡くなられたのが十一年でした。亡くなられたと同時に、知事から「治水問題をやるには、県に根まわしなくてはむずかしい」と言われ、私もそう思っていました。そこへ県会へ出てほしいと頼まれて、大川さんの息子さんに相談すると、「いいですよ」と言われて出る気になりました。大事なことは、全てこの方に相談いたしました。

農協をやる時には、ずいぶん苦労しました。郡で役員団をつくる時にも、本当の組合長は大川さんで私は専務でしたから。専務はそのような位置にはつけないのです。しまいには郡の方から「組合長でなくても、なってもらいましょう」といわれ、なったのですが。県議選では最高点をとりましたよ。自分でも驚きました。お金はたいして使わなかったのですが。

○ 原先生の日頃の仕事ぶりが、ある意味で皆さんに認められたのでしよう。

原

そうですね。私も、いかにしたら人に良い感じを与えられるかを知っていました。村の農協にしても、組合員が利用してはじめて良くなるのです。預金をしてもらう、肥料を買ってもらうとか。言葉は絶対に相手よりも先にかけましたし、それから、大川さんに教えていただいたのですが、おじぎをする時でもできるだけ頭を下げるようにしていました。これは相手の心をつかむことと、健康のこととも考えて……。 (笑)

ほんの少しのことです。

○ 四十五歳で県議員になられて県政に入られて、どんなふうに感じられましたか。

原

県全体のことをしなくては、と思いました。自分の所のことは第二番目なのです。治水問題に関しては、幸いなことに、大津という知事が力を入れてくれました。ずいぶん助かりました。「実業の日本」のなかに、木村兵太郎氏が出ていまして、日東村(川越)の出身で、すぐに連絡をとりましているところと力をかしてもらえるようになりました。そのうち

原

○

に戦争になりました。私は大政翼賛会の親玉にされまして、松根油をとれということ、農協や役所をまわりました。その頃、農林大臣から衆議院議員になれといわれました。大川さんは、もう治水問題は解決したから出てかまわな、とおっしゃいました。

県会議員はいつ頃辞められましたか。

二十一年頃です。その後、共同で出られる方法がありました。連記というものです。懇意にしていた平岡という人が連記で出ようというので、大川さんの息子さんに相談すると「いい」とおっしゃるのです。終戦直後でたいへんだったのですが、軍資金を出そうとおっしゃるのです。私は驚きました。そんななか、平岡と仲がまずくなり、彼が引っこんでしまったのです。平岡は金持ちでしたから、せっかく出ようとしていた私は、やめざるをえなくなって、全て帳消しとなりました。人生というものが嫌になりました。

○

原先生は、ガス会社、企業を始められたのはいつ頃ですか。

農協に二十六歳で入り、三十一歳の時にガス会社が川越にできました。大川さんが顧問、私が社長、松永さんが常務でした。川越、浦和、熊谷にガス会社をつくりました。はじめは川越。うまくいくはずはありません。でも「村のほうはどうか軌道に乗ったから、ガス会社をやってくれ」と大川さんはおっしゃるのです。私は、とにかくひきうける以上は、その仕事が良いか悪いかを考えました。ガス事業は、都会での燃料になくてはならないものです。当時は、山の木を切り、薪をたくさん作っていました。それをガスにすれば、水害を減らすことにもなります。石炭をただ燃やすのではなく、ガスにしてその残りでコークスやタールというものが出るから、資源を無駄なく使うには良いと考えました。ガス事業は、国のためにも村のためにも良いと思ってひき受けました。

○ 今の武州ガスは、すぐく発展していますが、ここまでくるのには、昭和の初めからかなりの迂余曲折があったことと思えますが…。

原 当時、一五〇〇〜一六〇〇戸だったのが、今は八万戸ですからね。想像もつかないです。でも私は、頼まれたからやっただけです。たとえば所沢や狭山にしても、住宅公団ができるからといわれてやったのです。自らというのではありませんでした。

○ 経営の内容には、先生独自のものがおありでしょうか。

原 経営は、公私を混同しないこと。初めは無給でした。いくら経営状態が悪くなくても、職工さんと同じくらいの給料でずい分いました。従業員は大事にしました。どんなに会社が困っても、標準より低い賃金を出すのは罪悪だと思っていましたから、どんなことがあっても標準より高く出しました。時間に関してもそうです。昔はひと月に二回しか日曜日がなかったところを四回でしたし、また、事務の人は九時出勤で現場に出る肉体労働の人は八時三十分と差があったところを、同じにしていきました。ともすると経営者というものは、公私を混同しがちですが、自分の欲を出してはいけません。

○ 先生が県会議員をなさり、治水事業にとりくまれ、そして企業人でいらっしゃること…。本当に坂戸の東の方の人々は助かっているわけですね。市民の生活は、それだけ豊かになったわけです。そのような仕事をやってこられて、今の坂戸市の産業界、企業界に何かおっしゃりたいことといたら…。こういうことが足りないとか…。

原 坂戸というより日本のためにね。今、日本は世界でも一、二位です。物価は安く大量にあるし、豊かです。でも、お金がありすぎるといことが、かえって害になることもあるのですよ。自由貿易になったら大変です。



昭和5年、35歳

農業にもっと力を入れなくてはね。今は出かせぎ農業だから、農業への関心や研究心が農家の人たちに欠けています。人が働いて収入を得、あまったものは他の人たちへ、という考え方が変わりつつあります。

(三)

昭和六十一年十二月十三日

対談者 図書館長 飯高節子

○ 原先生は、とても健康そうですが、どのようにして健康を維持していらっしゃいますか。

食事には気をつけています。毎日、体に必要なものをバランスよくとるように。

それから、朝晩の体操も欠かせません。肉体と精神が同じようではなくてはいけません。肉体がしっかりしていなければ、気力とか判断力という心の健康は、成り立ちません。

何といっても健康が一番です。(※食事のメニューと、毎日の生活スタイルは、P24に記載)

○ 体の健康の一番の土台は食生活ですね。それともう一つ、規則正しい生活ですね。健康であるからこそ、やりたいことができるのですね。

そうです。健康を侵されてしまったら何もできません。長寿国といっても、寝たきりになったりしては何の意味もありません。

○ 原先生におめにかかっていると、九十一歳とお聞きしていながらも、人間としての年輪のよなものとは当然感じられますが、それとは逆に年の差を感じさせない若さというものが、原さんにはおあります。

「老齡となっても老人となるな」という格言があります。年をとることは避けられませんが、青年の気持ちのままという事です。

○ 心の健康についてはいかがでしょうか。

原 つねに良き師、良き友、良き書との出会いを心がけていることです。

○ 良き師とは、大川さんのことですか。

原 そうです。良き師を持てたことが、私の一番の幸せです。

○ 桜影会から大川さんの資料がまた送られてきました。五十周年記念展が開かれた際に、大川英雄さんから桜影会へ資料が寄贈されまして、それを図書館へくださったのです。その中には渋沢栄一から大川さんに宛てて書いた手紙や、大川さんが外国で使われたと思われる図書などもありました。ずいぶん一生懸命勉強なさったのですね。

原 一日三〜四時間しか眠らなかつたですから。実業界へ入り、社長になられてからも勉強していました。頭はいいのですが、渋沢さんには、世の中のためであろうという気持ちの実業よりも強くて、儒学のほうへ進みましてそれで名が世の中に通りました。

大川さんは渋沢さんと違い、実業のほうで通りました。すごい努力家で、英語に関しては、アメリカで都会だけでなく、田舎でも通じるよう、何とおりか話せました。辞書を四年に一冊、書物のつもりでボロボロにしていました。

○ 良き友というのは。

原 もう亡くなってしまいました。議員をやっていた人とか、いろいろと参考になる人が多ぜいました。

○ 書に關しては。

原 一番印象に残っているのは論語です。大学へ進むかわりに本を読みました。マルクスやアダムスミスとか。

○ 大川さんが、マルクス・エンゲルスを勉強なさったというのは本当ですか。

原 したでしょう。でも、はやくからだめだと言っていました。マルクスは理論は良いのですが、人間の性質は平等ではありません。それを平等にやっても生産は上がりません。そのことを誰かが理論だてていましたが、はやくに亡くなってしまい、実行できませんでした。それを行ったのがレーニンでした。

○ レーニンの「農民に与うる書」を私も若い頃に読みましたが、本当に説得力のある本です。読みきる力がなくて、ただ感心してついていってしまうと、たいへんなことになりますね。

原

そうですね。マルクスの理論について「三十歳前にマルクスの理論に感激しない人は頭が悪

い、ただし三十歳すぎてもなおこれを良しとする人は、もっと馬鹿だ。」と誰かが言うように、三十歳をすぎて人間の本質をよく知ってくると、この理論はだめだとわかるのです。でも、一度は読んでおくべきだと思います。アダム・スミスの資本論とともに、自由と競争です。その一方で、道徳というものが絶対必要なのだとすることを忘れてはなりません。道徳と一緒にやらなくてはだめです。アダム・スミスはそう言っています。渋沢栄一は、”片手にそろばん、片手に論語”でした。偉い人はそうです。

○ 原先生のように経済界で仕事をなさる人は、大もとになるきちんとした理論を持たなくてはだめなのですね。ところが行政はその理論を持たないのです。

責任がないからです。それに短い期間で人が交替してしまいますから。経営者というのは自分で全てをやらなくてはなりません。良くしなければならぬ重大な責任があります。切実ですよ。そのためには、自由と競争と同時に道徳を考えなければなりません。

大きい事業家は道徳を重んじています。だから発展があるのです。何といても人間は自分が一番尊いのです。その自分を粗末にしています。人としての道を守らない、会社へ行っても遊んでいる。心に悪い草が生えてもむしらない。朝も晩も全々磨こうとしません。孔子でさえ「日に三度我が身をふり返る」と言っています。「人の為に謀りて忠ならざるか、朋友と交わりて信ならざるか、習わざるを伝えしか」と。人のために物事を行うのに自分の真心が十分であったか。友だちづきあい以信義を尽くしたか。習ったことでまだ不十分なものを他人に教えなかったか、という意味です。今の人は自分のことに無関心です。これでは良くはなりません。



昭和15年、45歳 県会議員当時

原

○ この頃の人の中に「俺が」という意識の強い人が増えましたね。

そうですね。人はどうでも自分さえよければいいという人が増えました。お金さえあればという人が。人としての道を歩んでいけない人は、どこかでつまづいてしまうのに、そのことをわかっていないのです。

○

私などは、はじめのうちにはなぜ図書館の仕事をしなくてはいけないのかと、ずいぶん悩みました。思考を重ねていくうちに、その悩みを通りこして、国からお金をいただいて学習させてもらった分、自分の持つものを必要とする人がいるなら、役に立つのであればお返ししよう、と思うようになりました。それまでの距離は、ずい分ありました。そうなってくると、不思議に人の気持ちが見えてくるようになりました。

原

平凡な人は、それがわかりません。自分のことに無関心だから気づかないのです。

私は、家庭学校と社会大学が大切だと思うのです。子どもがいる以上、その家庭が自分の学校なのだと思いはしながら子どもを育てればよいのです。また、学校を卒業して世の中に出てくることが問題です。世の中が社会大学です。いい人に合ったり、自分から人としての道を求めて勉強する、というようなことが大事です。

今伸びている人を見ると、社会大学での優等生ですよ。人間は、生まれつきと努力と運で良い悪いが決まります。

天才でも努力しなければなりません。天才でなくても努力して幸運にめぐまれば……。でも、いい運がめぐってきてても、つかめなくちゃだめです。そういうのを「運が悪い」というのでしようが。吉川英治は、「自分を除いた人はことごとくこれ、我が師なり」と言っています。

悪い人に合ったとしても、悪いことをした例を見ることにより、もっとわるいことをしないようにという教訓になります。

社会大学に入るのに月謝はいりません。入学するには、自分を顧み、感激する心があることで

原

○ 坂戸市にお生まれになって九十年間生きてこられて、これからの坂戸市の人たちに、自分の後輩に、こうしてほしいというものはありますか。

豊かな心になってほしいですね。そのために、小学校の頃から道徳を身につけてほしいです。道徳を中心しない学問なんてー体育や知育だつてーあつても害になります。上に立つ人が機会のあるごとに、こういうことを話さなくてはね。

少し、日本が平和すぎて物が豊かですから、油断もできてきて、同時に教育の仕方も変わりました。

明治の頃は、国民の三大義務といって、国防（愛国心）納税、教育というものがたたきこまれていました。今はそれもないから、納税なんかひどいですよね、脱税が。余計に働いて利益があつたら、払わなくてはいけません。義務ですから。自由にしといてごまかしがはびこるのなら、昔のように自由でなくしてしまえばよいのですが。

○ そういうことに加えて、今坂戸市の後輩に対して思っているらっしゃると同じようにー坂戸市の中に新しい企業が増えてきましたが一坂戸市の発展というものは、どういうものか一番ウエイトをおいていくべきだと思いますか。

原

これからの坂戸市の発展は…何といつても日本は農業ではもう進んでいきません。工業を大事にする。農家をやっていても、半分以上は出かせぎです。そこで工業の小さいのがくれば、めんどろをみてやる。同時に、市民の半分以上はサラリーマンですから、住みよいようにしてやる。あとは、伸ばして市が収入をあげるものはありません。住民税をとる。幸いに坂戸市は東京に近いから、やり方次第で人口が増えます。人口を増やして住民税をとる。工業を伸ばす。



昭和30年、60歳 藍綬褒賞受章

農業はゆきづまりですから、どういふふうにしていくかが問題です。かなりの変革はあると思
いますが、むずかしいでしょう。米をつくらなくなってしまうのは…

役職歴抄

- 大正 四年（一九一五）三芳野村青年団長
 大正 五年（一九一六）紺屋養蚕組大員
 大正 一一年（一九二二）三芳野村信用購買販売組合専務理事
 昭和 四年（一九一九）武州瓦斯株式会社監査役
 三芳野村村会議員（至昭17）
 昭和 五年（一九二〇）武州瓦斯株式会社専務取締役
 昭和 一〇年（一九三五）帝国瓦斯協評議員
 昭和 一一年（一九三六）川越市養蚕連合会会長
 昭和 一三年（一九三八）三芳野村農会会長
 昭和 一五年（一九四〇）埼玉真会議員（至昭22）
 昭和 一六年（一九四一）埼玉県産業報国会常任理事（至昭20）
 入間川水系改修期成同盟会会長
 昭和 一七年（一九四二）三芳野村村長（至昭21）
 大政翼賛会人間支部長
 昭和 一八年（一九四三）大政翼賛会埼玉真支部常務委員
 埼玉真農業会理事・人間支部長
 昭和 一九年（一九四四）入間郡町村長会副会長（至昭21）
 三芳野村農業会会長（至和21）
 昭和 二三年（一九四七）武州瓦斯株式会社取締役社長
 昭和 二六年（一九五〇）日本瓦斯協理事
 関東信越瓦斯協同組合理事・組合長（至昭47）
 昭和 二七年（一九五〇）三芳野農業協同組合会長
 昭和 二九年（一九五二）坂戸町教育委員会委員長（至昭30）
 入間地区農業協同組合会長
 昭和 三三年（一九五七）埼玉真公安委員長（至昭40）
 所沢瓦斯株式会社設立・取締役社長
 昭和 三四年（一九五九）武州産業株式会社設立・取締役社長
 昭和 三六年（一九六一）入間川水系改修期成同盟会顧問

昭和 三七年（一九六二）埼玉真公安委員長（至昭38）
 昭和 三八年（一九六三）埼玉県産業教育振興会人間地区会長・人間支部長
 武蔵野瓦斯株式会社設立・取締役会長
 埼玉真瓦斯友会会長
 川越商工会議所会頭

昭和 三九年（一九六四）埼玉真公安委員長（至昭40）
 西武石油ガス株式会社取締役会長（至昭48）

昭和 四三年（一九六八）埼玉真商工会議所連合会副会頭
 昭和 四四年（一九六九）埼玉銀行埼玉連合会会長

昭和 四六年（一九七二）坂戸ガス株式会社設立・取締役
 昭和 四七年（一九七三）学校法人埼玉医科大学理事

昭和 四八年（一九七三）西武石油ガス株式会社取締役会長
 昭和 五一年（一九七六）武州産業株式会社代表取締役会長
 武州産業株式会社代表取締役会長

受賞歴

昭和 一六年（一九四一）産業組合中央会功労章

昭和 一七年（一九四二）大日本蚕業会功労章

昭和 一九年（一九四四）埼玉真産業功労章

昭和 三〇年（一九五五）藍綬褒章（治水の功労）

昭和 三三年（一九五八）全国農業協同組合中央会特別功労章

昭和 四〇年（一九六五）勲五等双光旭日章

昭和 四一年（一九六六）全国河川協会表彰

昭和 四五年（一九七〇）国税庁長官表彰

昭和 四七年（一九七二）大蔵大臣表彰

昭和 四九年（一九七四）勲三等瑞宝章

（「追憶抄」より）

原氏の食事

毎日同じものを同じ量いただいて、約30年になるという。

(朝) ○お茶	
○薄塩の梅干… 1コ	
○昆布の煮たもの少々	
○朝蘇人参に棗と生姜をまぜて煎じたもの…60cc	
○生卵… 1コ	
○ご飯… $\frac{1}{3}$ 杯	
○あじの干物… 1枚	
○ほうれんそうのおひたし	
○みそ汁… 1杯	
○果物と野菜のジュース	
○牛乳… 1カップ	
○丹波の黒豆… 大さじ 1杯 (食後)	

(昼) ○うどん (のことが多い)	
○牛乳… 1カップ	
○果物	(会社にて)

(夜) ○酒… 1合弱	
○そら豆・数の子・うに	
○野菜の煮物	
○豆腐	
○魚または肉少々	
○牛のスープ	
○ご飯… $\frac{1}{3}$ 杯	
○りんご… 1コ (すりおろしたもの)	
○和菓子… 1コ (食後)	

原氏の1日

毎日おおよそこのスタイルで、朝晩の体操は続けること50年という。

5:30	起床
	洗顔～礼拝～体操 (3分間)
6:40	
7:10	散歩→ (大雨・大雪の日は家中で青竹を踏む)
30～	
8:00	朝食等
9:00	
9:40	出勤
12:00	昼食
16:00	帰宅～散歩
:30	
17:00	
18:00	夕食
19:00	
20:00	入浴～体操 (3分間)
21:00	就寝

あとがき

昭和六十一年は、坂戸市出身の偉人、大川平三郎の没後五十年ということで、その記念展が桜影会（大川平三郎が設立した育英会出身者で成る）により、紙の博物館を中心として開催されました。新たな資料も展示され、その一部を当館でも譲り受けることになりました。

今後も坂戸市として大川翁の資料を収集していくにあたり、翁の薫陶を受けられた坂戸市名誉市民・原次郎氏に関する資料も集めることになり、原氏に対談を申し出ますと、こころよくひきうけてくださいました。

明治二十八年生まれ、九十一歳。ユーモアと人生訓・処世訓を交じえた人をひきつけるお話、抜群の記憶力、そして子どものような笑顔から、年齢を超えた”若さ”さえ感じられる現在の原氏。三回にわたる対談を通して得られたその魅力の源をここに記し、多くの人々に愛読されることを願ってやみません。

（坂戸市立中央図書館）

原次郎氏が語る大川平三郎

―原氏の来し方九十年―

昭和六十二年三月二十一日

坂戸市立中央図書館